

令和元年5月29日(水) 並木幼稚園長 渡部栄城

← 平成20年12月22日



身内の話ですが

校長 渡部 栄城

私には、姉が三人います。私は四番目の長男で、ばっちはです。というわけで、姉たちから、いろいろな話、子育て、生徒指導(??)に関する事などを聞きます。

二番目の姉は、仙台で旦那と出会い、長野に移り子どもが三人で、みな男でした。

長男は、まじめでした。サッカーのスポ少に入りました。が、レギュラーになれることはなく、ずっと補欠でした。次男も同じスポ少に入りました。

た。レギュラーになり、県の選抜になるほどでした。長男は高校に入ると剣道部を選択しました。

次男は、結構、調子がいいところがありました。長男が次男に言うには、どこまで本当かは分かりませんが、「お前みたいのをとりしまるために、俺は警官になるんだ」とのことでした。

長男は決して優秀ではありませんでしたが、法学部を希望しました。浪人しました。

法学部に入ったかどうかはちよつとろ覚えですが、とにかく警官になったのでした。私は心から喜びました。

で、次男はというと、高校を卒業したら、調理師の免許を取れる専門学校に進学することにになりました。ところが卒業式の日、バイクで事故を起こし、生死をさまよう重体になってしまいました。よくて植物人間と覚悟したほどの状態が、一年の間に手術を何度か行い、リハビリの結果なんとか歩けるようになったのでした。まさに奇跡と言っていたほどの回復力でした。専門学校の方は、一年間入学を待ってくれました。

次男は、学校を卒業し、某料理人が経営する大阪の支店で住み込みで働くことになりました。十人を超えて入った人数が、次第次第に減っていくのでした。なんせ、後片付けが終わって帰るのは、午前様、起きるのは仕込みがあるため午前5時。で、母(私の姉)が、次男に聞きました。「なんで、お前はやめないの?」

次男が言いました。「もう、これ以上迷惑かけられないから」

平成23年7月20日



慌ただしい朝の中で

校長 渡部 栄城



四月下旬の慌ただしい朝であった。当日も東日本大震災の影響で弁当づくりの日。例年のこの時期より四十分ほど早く起きてはいたが、そんな中、テレビではいつものように有名人による被災者への励ましコーナーが始まった。私は朝食を終えたところだったので、「この時間に後片づけを」と、こたつから出ようとした。と、その時、「不可能は可能の始まり」とかいう色紙が映し出された。私は一瞬、「えっ?」「うそだろ?」「何言ってるの(書いてんの)?」

「こんないい加減なことテレビで放映していいの?」と、思った。「可能の始まり」というところが「可能性があるということ」だったか「可能性の第一歩」だったか記憶が曖昧になってしまったが、その色紙を見たとき違和感を覚えたのは確かであった。

憶も曖昧だが) 言えるのは、その選手自身確かに「不可能」「絶望」を体験していたということ。そして、見事に、「不可能を可能にした」ということ。立ち直ったということ。 そうなのである。人間、「不可能」と言うとき、それは、「可能」の第一歩なのである。要は、そこからさらに歩み続けるかどうかなのである。可能の実現を目指し歩み続けたとき「不可能」と思われたことが「可能」になることもあるのである。

慌ただしい朝の中、テレビを離れ、その選手の言った意味が、自分なりに分かったとき、目の前は霞んでいました。

STAIRS

(スティアーズ・階段)

平成22年5月の
No3 H22.5.28 郡山市内の某中学校の
ホームページからです。

☆いよいよ 中体連です。

6月1・2日(火・水)に市中体連が行われます。中は、ご存じの通り、部活動が大変盛んで、多くの部が次の県中大会へ駒を進めます。中には、県大会、東北大会、全国大会に出場する部もあります。しかし、そのすべての大会の始まりは、今回の市の中体連大会なのです。

この大会を迎えるまでに、様々なことがあったことでしょう。悔しくて泣き、うれしくて泣き、友との確執に苦しみ、あこがれの先輩との別れ、チームをまとめることができずに苦しんだこともあったでしょう。それでもここまで続けてこれたのです。もちろん自分ひとりでここまでできたわけではありませんよね。家族の励まし、顧問の先生の指導、そして、チームメイト・仲間がいたからこそ、今こうして大会を迎えることができるのです。多くの方々に支えられてきたことに感謝し、精一杯戦ってきて欲しいと思います。

3年間厳しい練習に耐えてきたのです。誰もが勝利を願いながら戦います。勝利したチームがあるということは、敗れたチームがあるのです。そうした敗れたチームのそばで、勝利をおさめたチームの人たちが、大声で話をしていたり、ふざけあったり、食べたり飲んだりしながら歩いていたら、いったいどうなるでしょう。本当に強いチームとは、そういったことを自然に考えられる人たちが集まった集団ではないでしょうか。試合もすばらしいが、それ以上にマネーや礼儀がすばらしい。やっぱり強いチームは違いますね。と言われる中であってほしいと思います。

私は、中体連を前にするとどうしても思い出す生徒がいます。以前に紹介した花子さん(仮名)です。繰り返しのなりますが、もう一度紹介します。

ふと以前教えた子どものことを思い出した。来る日も来る日も、死ぬほどソフトボール部の指導をしていたときのことである。

その子は、体も小さく、運動能力も低く、誰が見ても、ソフトボールなどできるとは思っていなかった子どもである。仮にその子の名前を花子さんとしましょう。

花子が中学に入学し、ソフト部に入部した。キャッチボールをしている姿を見ていると、ボールが前に飛ばず、右にいたり左にいたり、時には真横に飛んでいくのである。あらら困ったなあと思い、そばに行ってみると、その子の指の長さが気になった。「手を見せてごらん」と声をかけると、目に涙をいっぱいためて、そっと私の前に手を差し出した。中指と薬指の第一関節から先の部分、さらに人差し指の指先がなかったのである。私は、言葉を失った。これまでの彼女の歩んできた日々を考えたとき、彼女を支えてきた家族の気持ちを考えたとき、これまでの彼女の苦しみや悲しみを、これから年頃となり多感な時期を迎える彼女に、かける言葉を見つけることができなかった。

その夜、母親からの電話があった。彼女が2歳ぐらいのときに、牛の胆を裁断する機械に指をはさめ、指先を切断した。そんなハンディを背負いながらも、入部は彼女自身で決めたので、何とか面倒を見てほしい。そんな内容であった。

その後、彼女は一生懸命練習に取り組んでいった。それでも、満足にボールを投げることはできず、試合に出ることはもちろん、練習にもついていくことすら難しい状態であった。

1年がたった。この1年間、一日も休まずに練習に取り組んでいた。それでもボールを投げることはできなかった。彼女の努力に報いることのできない自分が情けなかった。

2年生の夏休み、新チームがスタートした。彼女はファーストのポジションを守っていた。ほんの少し、ボールを投げるできるようになっていたが、人数が少ないため、レギュラーになったのである。過去数年続けて県大会に出場していたため、当然自分たちも県大会に出場すると思っていたようであるが、チームとしての実力はまだまだであった。その上、ボールを投げることのできないものが試合に出ているのであるから、練習試合の結果は厳しいものがあつた。

そんなある日の練習試合で事件は起こった。相手は、県大会の優勝候補。その相手に対して1点リードで迎えた最終回、ワンアウト2・3塁。おさえれば大きな自信。同点かそれとも逆転されるのか。不思議と冷静にその場を見ていた。ショートゴロ。サードランナーを見てファーストに送球。この時点でツーアウト。サードランナーは、ショートがファ

ーストに送球すると同時にホームに向かってスタート。それでもスタートが遅れ、ファーストがホームに投げれば余裕でアウト。誰もがそう思った。その瞬間、花子の投げたボールは、ホームから大きくそれた大暴投となった。2塁ランナーもホームインし、結局逆転され負けた。大きなため息が会場に漏れた。

そんな中、花子は泣き崩れていた。誰も花子を買めなかった。花子のハンディも、そのハンディを乗り越えようとして一生懸命に努力してきたことも知っていた。花子の両親もそこにいた。保護者の中からも責める言葉は一つも出ていなかった。

それまで冷静だった私だが、我慢の限界だった。選手はもちろん、保護者も集めて、泣きじゃくる花子に向かってこう言った。

「何を泣いているんだ。泣いたらボールが投げれるようになるのか。泣いたら無くなった指が生えてくるのか。ここにいるみんなは、お前の今までの努力は認めているが、それと同時に前にも同情しているんだぞ。」

「お前以外が同じプレーをしたら、どうなると思う。」

「やっと試合に出ることができるようになったんだよ。やっと人並みになったんだよ。」

「ここからが、スタートなんだよ」

今思い返しても、あまりにも厳しい言葉である。この子の今までの歩み、これからこの子が進んでいく道を考えたら、花子にハンディを背負わせてしまった両親の心の痛みを考えたら、もう十分に苦しんでいることをわかりながら、発してしまったこの言葉。

その夜、両親に失礼をわびようと花子の家を家庭訪問した。道路から花子が父親とキャッチボールをしている姿が見えた。そのまま黙って帰ろうとしたとき、花子が私に気づき大きく手を振った。私は、ただ両手を振ることしかできなかった。

それから花子は変わった。朝から晩まで、ほんの少しの時間も無駄にせず、ひたすら壁にボールを投げ続けた。朝も昼も放課後も、雨が降ろうが風が吹こうが投げ続けた。すると不思議なことが起こった。指先にまめがで、それが硬くなり指先のようにボールに引っかかるようになったのである。

3年になった。何もできなかった花子が、あの泣き崩れた花子が、まったく違っていた。チームメイトも花子に負けないようにとがんばった。そうして無理と思われていた県大会に出場することができた。なんと1回戦の相手は、2年の夏、花子が暴投をして泣き崩れ、花子が大きく変わるきっかけとなったときのチームだった。

やはり同じく、1点リードの最終回。2アウト1塁。バッターは3番。長打が出ると同点、ホームランならば逆転という状況だった。

打球が右中間に飛んだ。長打になった。それでもセンター、セカンドそして花子がボールをつなぎ、バックホーム。判定はアウト。

あの花子が、指を失った花子が、ボールが投げることができず苦しんだ花子が、最後の最後に大きな光を放ったのである。

花子が引退するとき、チームメイトや家族への感謝の気持ちを伝えるとともに、こんな言葉を残した。

「この指だからよかったです。指よ ありがとう」

世の中には、〇〇理論や〇〇の法則があり、それらでノーベル賞をいただいたり、世の中に貢献したりしていますが、私にも、この〇〇理論〇〇の法則が、いくつかあります。ノーベル賞をいただけないことは知っていますし、ともすると、だめ出しや誤解をまねくこともありえるかな とも思うのですが、私としては、〇〇理論や〇〇の法則でとらえたり、進めた方が、けっこう、よい結果につながったものですから、また、ある意味、至極常識とも言えるのですが、あえて。

【「黒板」理論】 「黒」と「みどり」の違いは、1年生も知っているが、教室の前にある緑の板を、「黒板」で、児童も教師もおとしている。信号機の「あお」もそうですが、ほかにもけっこうありますよね。でも、言葉って、時代とともに変遷(へんせん…時の流れとともに移り変わる)してきていますよね。私としては、「リよくばん」に変えろ、と言いたいのではなく、それでいいということ、そういうこともけっこうあるよ、ということを知りたいのです。黒板の発明を称えるため、維持するため。そういえば、小学生の時、担任の先生から、緑になった理由を聞いていました。「目が疲れなように」と。

【小学校における「おはようございます」理論】 これには、私も、けっこう悩み、時間を要したことを思い出しました。「なぜ、小学校では、先生が、児童に、「おはようございます」と、丁寧に言うのだろうか。それは、ある本か記事を読んだときに、分かったように覚えています。それは、小学校では、「児童の立場で、言葉をつかう場合がある」と。つまり、児童に、こう言わせたいということ、そのまま教師も言った方が、児童には、分かって貰えて、身に付けさせやすいとの理由だったように覚えています。そうです。これで、思い出したのが、「ラジオ体操」のときの、先生の「右・左」です。自分が右を向くとき、先生は、左を向くのです。「なんでかな〜」と、思った時があったことを思い出しました。この理由が分かったのは、先生になってから だったかな？

【ついでに〇〇「先生」理論】 これは、私の人生の中では、けっこう最近確立し実践している理論です。それは、児童に話すときや学校だよりでは、同僚の教職員の名前を呼ぶとき、「〇〇先生」と、「先生」をつけることです。まあ、児童に話すときは、「先生」をつける先生が多いのは知っていますが、学校だよりともなると、「〇〇が」と先生をつけないで書く(実際は、「打つ」?)のが正確とは、学んだのですが、一度、いや、何回かそうしたこともあるのですが、上記の2つの理論もありまして、また、そう記した方が、ペンが進む(実際は、キー打ちが速くなる?)ので、そのようにさせていただきます。児童には、呼び捨てをしないようにと教えているので。 実際、保護者の前で、「教頭が」とか、「〇〇が」と言ったら、ちょっと変な雰囲気はただよったものですから。 そうです。これの極めつけが、児童の前では、「私」と言うときもあります、自分のことを「校長先生」と言うこともあります。

さて、いよいよ本丸です。果たして上手く書けるかどうか不安ですが、今回も挑戦したいと思います。

【世の中のほとんどは「相対性理論」】 「相対性理論」という言葉と「アインシュタイン」という言葉は、一度は耳にされたと思います。しかし、「相対性理論」に関する専門書を読まれた方は、ほとんどいらっしやらないのではと推察いたします。かくいう私も、専門的には読んではいません。でも、某学校の教頭時代、図書室に、写真や絵で記してあった本があったものですから、また、マンガの(偉人物語)『アインシュタイン』もあったものですから、読んでみました。私の頭脳では、要は、「相対性理論」は、文字通り『「相対性」でいい』と解釈しました。これは、小学校の「長さくらべ」でもやりますが、1本の鉛筆だけでは長さは比べられなく、もう1本あることによって、相対的に決まるということ。もう1本が長ければ、最初の1本は、「短い」であって、逆に短ければ、「長い」になるということ。背が高い、足がはやい、頭がいい(?)なども、比べる人によって、入っている集団によって異なってくるということ。つまり、これらには、「絶対」は、ないということ。(ここで、「ウサイン・ボルトは？」なんて、つっこまないでください)

【絶対性理論】 これは、何かと言いますと、「当事者にとっては、絶対で、まず、ほとんどが、ほとんどの場合が当てはまるのでは？」という理論です。一番身近な例でいいますと、子どもは、まずは、自分の親が一番、または、絶対的にいい親であってほしいと願う論理です。ちょっと歳をとってきますと、ちょっと客観的に見るようにはなりますが、それでも、何かしらでは一番、または、何かしらは誇れるのではと願う論理です。 分かりやすく言いますと、小さい子どもは、自分の親が一番と思っているということです。自分の学校が一番と思っていることです。 野球好きな父親で言いますと、高校野球やプロ野球を観ていて、ほとんどの父親は、(私もそうですが)自分が日本一、いや世界一の監督では？ と思ってしまうことがあるということ。 野球好きの父親のことを否定したり揶揄(やゆ…からかうこと)したりするのは、まあ、それぞれの関係で、当事者達にお任せしたいとは思いますが、否定したり揶揄したりしないほしいのは、「ぼくのお父さんは、日本一の〇〇です」「私のお母さんは、日本一の〇〇です。」「私のおじいちゃん、…」「私のおばあちゃんは、…」「ぼくは、日本一の〇〇になります」「私は、日本一の〇〇になります」 ちなみに、私、これまで勤めた学校が、何かで日本一になることも願っていますが、 小学校が何かで郡山市内一、福島県一、日本一になることも願っておりますし、なれるのでは？ と思っている今日この頃であります。

何か書き忘れていたような…。

第9号の最後の一文があるので、ちょっと思いつくままに。

【だめもとの法則】 これは、私の場合ですが、これをやるかやらないか、これを言うべきか言わざるべきかで、悩んだ場合、「だめもと」と自分に言い聞かせると、決断でき、それをやったり、言ったりした方が、思いの外、結果がよくなる場合が多いという法則です。 ちなみに、最近のだめもとは、本年度の第1回目の職員会議の資料でした。あれがきっかけで、現在に、至っています。学校だより発行の新記録(私にとっての)につながっています。

【献立が決まるとの法則】 これは、それほど多い事例に遭遇してはいませんが、数名の証言から、推して知るべし と思った法則です。 家族の食事担当の方が、けっこう悩まれるのが、「今日の夜の献立」でした。何かの会話から、その方が、「そうだ、今日は、〇〇にしよう」と、思いついたとき、決断されたときの表情がとても生き生きしていて、その後の仕事に活気が出る場合が多かったものですから、私は、この発見を、世の中を動かす大事な法則と心に留めました。 この法則は、誰もが、まずやらなければならない課題があり、まず、その課題を解決すると、その後が好転するという原理に基づくものでは? と思ったのです。 私も日々、いろいろな献立に立ち向かっております。

【かけひきの法則】 私は、これを発見したとき、教育の道が確固たるもの(ちょっと大げさです)になりました。それは、人は、生まれたときから、かけひきを始めているという事実です。 どういうことかと言いますと、赤ちゃんは、母親に、おちちの件で、かけひきをしている ということです。母親と。どのくらい泣けばもらえるかと。 これの次のステップが、けっこう目にする、おもちゃやでの場面です。 大好きなおもちゃの前で、子どもは、全身をつかって、親に訴える、あの名場面です。子どもは、本気です。全力で、親とのかけひきを行っています。 結婚前はもちろんですが、結婚後も…。このかけひき、どちらかが降参すると終わりでありまして。そうです、私は、家庭ではかけひきはしていません。 児童とは、いい意味でのかけひきはしてあります。 今度話すネタは、これにしようか、あれにしようかと。 <追伸> 子どもにとって、おもちゃは、絶対性理論の一つです。この理論に打ち勝つには、かなりのエネルギーを必要とします。

【あさがおの法則】 日本全国で、1年生は、あさがおの学習をします。授業では、成長の様子を観察したり、記録したりします。テストの内容は、つるの向きを含め、ほとんど同じだと思います。 校長になり、毎年、毎年、1年生が、あさがおに水をやる姿を見て、思ったことがあります。それは、あさがおの一生とかかわることで、人の一生も学んでいるんだなということです。 あさがおとのかかわりは、テストに出ることだけでなく、いろいろなことを学べるということ。その中には、とても大事なこともあるということ。それに気づくのは、気づく時期を含めて、人それぞれであるということ。気づかないこともけっこうあるということ。 雨の日の次の日は、なぜ、水をやらないか。 あさがおは、なぜ水を欲するのか。 水を最も欲する時期は? 過ぎたるは猶(なお)及ばざるが如(ごと)し。 啐啄同時(そったくどうじ…逃すことができない好機)

【人はかわるの法則】 これは、皆さんも思い当たることが多いと思います。まざは、私の場合。音楽の時間、歌うのがいやだったとか下手だったが、今はそれほどきらいでもないし、自分では下手だとは思ってはいない。昔はやせていたのに今は…。昔は絵が上手かったのに今は…。昔は〇〇球団のファンだったのに今は〇〇球団のファン。 これは、教育の場合、本を読めなかった児童が本を読めるようになる であり、算数が苦手だったが、算数大好きになった であり、逆上がりができなかったが、できるようになったであり、水泳で25メートル泳げなかったが、100メートル泳げるようになったであり、 要は、学校は、日々、これの連続だということです。 ただし、人それぞれで、要する時間も人それぞれです。

以上、思いつくままに書きましたが、みんな、子どもも含めて、自分なりの理論や法則で生きていると思うのです。要は、それが、良い方に、良い方向に発揮されればと願っております。

しかし、「けっこう当たるな」と思うのが、昔から言い伝えられてることわざです。当たるからこそ、言い伝えられているとも思います。

私の場合、けっこうつかうのが、自分に言い聞かせるのが、「急がば回れ」と「善は急げ」です。時と場に応じて、つかいわけしています。「灯台下(もと)暗し」は、これまでの人生で、けっこうそうだったよな一と思えるトップかもしれません。

そう言えば、本学校だよりの第4号では、教育の「下(もと)」に光を当て、今回の第9号、第10号は、私の考え方の「下」に光を当てたのです。